

自分で責任を持って自分で選んだ道を自分で進む

語り手 中塚遼太郎（高校一期生 サービス業）

聞き手 井上愛結

立守一期生としての高校時代

―立守に入りたいと思ったきっかけはあったんですか？

うん。やっぱり「二期生」っていうのが一番惹かれるところであつて、生徒が僕らしいくないみたいなのをイメージしていて。実際違つたんですけど（笑）。元々あつた市立守山女子高校が立命館守山高校に移管されて、そこに一期生の僕らが入つたんで、僕らが一年生の時の二年生三年生は女子の先輩がいたんですよ。

―じゃあ高校一年生は男女共学ですか？

そうそう。一年生は共学で、二年生三年生は女子校みたいな。だから、入つたのは一期生なんやけど、卒業は三期生。当初中学生の時は先輩もおらんし、自由にできるかなと思つて受けたのが最初ですね。

―その時は、体育祭とか文化祭も女の子が多かつたんですか？

そうそう、一年生の時はほんとに女子校の文化祭に混ぜてもらつてるって感じやったね。それほど煌びやかな感じでもなかつたけど（笑）。もともとスポーツが強い女子校やつたつていうのもあつて、もうすごい、かつこいい先輩が多かつたかな。

―その時にあつた部活とかつてどういうものがあつたんですか？

剣道部とハンドボールが強かつた。ハンドボールとか今でも有名よね。すでにあつた女子の部活は継続して、サッカー部とかはなかつた。僕はサッカーやりたかつたから、部活を作るところから始めて。

―サッカーは昔から続けられていたんですか？

サッカーは小学校ぐらいから中学校までクラブチームでやって、高校になつてまだサッカーしたかつたんで、一緒にサッカーやりたい人を集めて、顧問の先生探してきて、場所を借りて、備品買ってもらつたりしながら。最初は女子校の高校のちっちゃいグラウンドを陸上部とソフトボール部に分けてもらいながらサッカーし出したつていうのから始まつて。

立命館守山が今の場所から動いたのつて一年の途中からで、最初また別の場所にあつたんだよ。元々、守女（守山女子高校）があつた場所で、そつちで授業終わつたら、今の場所まで走つて行つたりとか。

―一期生やつたら、ちょうど二〇年前ですか？

ほんまに。それぐらいやね、入つたのは二〇年前くらいかな。そつか、二〇年史やもんね（笑）。

―立守の高校時代で印象に残っていることはありましたか？

僕らの場合は本当に特殊で、「二期生」っていうのがあつたから、校風とかも別に何も決まつてなくて。そもそも文化がないから。だから、それを作つていけるつていう面白さもあつて。自分らがやったことが、その高校の当たり前になつていく。例えば、「生徒が活発な学校です。」とか、「勉強に熱心な学校です。」とかつていうのを自分らで決められる立場やつた。その辺は楽しくて刺激的やつたかな。やから、他の人が作つてきたものつてよりも、自分たちが作り上げていくつていう。

―先ほど、立守の高校時代にサッカー部をゼロから作られたというお話をされていましたが、その時のエピソードやどのようなことを考えておられたのかお聞きたいです。

僕はサッカーがしたかつたつていうのがあつて、やるためには作らな

あかんから、っていうことで何人かと一緒に活動して。サッカー部を作ることに關してはみんな賛成してくれたし、サッカー部はあったほうがいいなみたいな感じだったんで、割とすんなりいって。

ただ、部員が集まらなかった。元々これもあった部活じゃないから、部活のスタンスみたいなものも定まっていなくて。だから、ただただ楽しみたい人とか、高校からサッカー始めたい人とかも最初来たし、ずっとサッカーしてきて、ここで上手になりたいって人も集まってきたし、その辺のギャップがあった。最初人数いたんだけど、そこから一気に減って、ほんまにサッカーやりたい人たちだけが残った。結局十五人やったかな、試合もギリギリやったし。出来立ってっていうのを言い訳にできんくらい弱くって(笑)。

そうしてる間に、大阪の割と強豪校の先生が来てくれはって、吉田先生っていう。その人が入ってきてからやと部活っぽくなってきてみたいな。でも今サッカー部強いやんな？

―はい。この間も近江に勝って。

そう。だから、自分が作った時っていうのは、そんなつもりなくて、まさかあの部活を続けてくれて、今これだけ強くなってるっていうのはびっくりした。

―サッカーを続けられた秘訣とかがあったんですか？

負けず嫌いやったっていうのは、多分一番あって。その時は副キャプテンっていう役割ももらってたんで続けてたけど。自分が一番自分を発揮できる場所がそこやったんで、大きい声出したりとかもあったし。その辺も楽しかったかな。

当時、僕らの学年は「一期生」っていう部分に惹かれて入ってる人が多いと思うんだけど、一期生になりたい人って、割と自分たちでそうい

うのを(好きなことや興味あることを一から)作っていくのが好きな人が多い。だから行事ごとがみんな好きで。合唱コンクールにしても、体育祭にしても文化祭にしても、全員がまっすぐ向き合えたというか、あんまその「俺興味ないわ」みたいな、傍から見ても頑張っている人を馬鹿にすることもなかった。だから、学年行事とかそういうのはすごい真っ直ぐできた。今はそれが良かったなって思ってる。

―卒業式とかの思い出とかってありますか？

卒業式ね、答辞読んだんですよ。

―えそうなんですか。

生徒会長とかではなくて、先生の無茶振りで。

―ははは。

大体生徒会長が読むんやろうけど、訳あって生徒会長が読めへんってなっちゃって、じゃあ誰が読むってなった時に、先生の中で、「三年間の学生生活を、一番楽しんでそうなやつ。」って言われて(笑)。

―すごい、選ばれたんですか。

そう、それで選んでいただいて。答辞を急遽作って、田辺先生と二人で練習して、みたい。やったなあ(笑)。

―ははは。

教室の後ろに立って、前に先生立っててもらって練習して。「声が小さい」とか言われながら(笑)。すごい懐かしい。

―結構そういうものって思い出に残りますよね。

うん。

―あんまちゃんと選ばれたりしてないといけないじゃないですか。

嫌やったけど(笑)。

―嫌だったんですか？

そもそも人の前に立つのが得意じゃないし、喋るんは好きやけど、緊張しいやし。今までそういうのやったこともなかったから、あれだけの人数の前で在校生と、後ろには卒業生いて前にも保護者とか先生とかバツていて、あのホールの真ん中で喋るって、大丈夫かなとか思ってたけど、まあまあ悪くはなくて。みんな泣いたりとかしてくれやし、今思うとあの経験ってすごく生きてて、あれだけの舞台の前で一人で喋ったんやから、会社の社員たちの前で一人で喋るなんて屁でもないし、とか。

—そうなんですね。

うん、自分の中でなんか割り切れると言うか、いい経験させてもらいましたねあれは。

—そこでできたから、できるだろうみたいな感じですか？

うん一回やってるから、できるやろうっていうのは、今でも支えとしてある。

大学卒業後の社会人生活

—結構大学になったら、自分のやりたいことに時間使えるようになると思うから私も来年どうなるのかなって考えているんですけど、やっぱり大学生生活って早いんですか？

今思うとね。やっぱりそれは早いかかな。

—高校とどっちの方が早いですか？

高校も高校で早かったしなあ。楽しい時間ほど早くすぎるから。でも結局どれが一番楽しかったですかって言われても困る。高校は高校で楽しかったし、大学は大学で楽しかったし。その辺は考え方やと思います。今一番自分が楽しいと思ってるかやね。

—今のお仕事も楽しいですか？

今の仕事も楽しい、です(笑)。最近思ったのは、自分が「しんどいこと」って自分ではどうにもできひんところだけなんですよ。

—というところ。

「自分で選んだこと」とか「自分で責任取れること」に関しては、楽しいで終われるというか。仕事の中で例えば、「楽しみながら仕事する」とか、「生きていくために仕方なく仕事する」とかのスタンスの話だったりするんですけど、人って自分で選んだことに対しては「自分に責任を持つ」ってことができるから、別にそれが思ってたことと違っても、「これ自分がやりたかったことやし」って思えるんですよ。

—うんうん。

だから楽しんでできるし、上達もするし、やり切れる。でも、その「仕方なく」っていう思いでやってると、上手いかなかった時に人のせいにできちゃうんですね。

—なるほど。

だから、「自分で選んだことやし頑張ろう。」じゃなくて、「やらなあかんことをやらされているだけなのに、なんで俺はこんな頑張らなあかんねん」とか「これは会社が悪い」とかに逃げられるんですね。別にそれが必ずしも悪いこととは思わないですけど、どうせやるなら、自分で責任をもつて自分で選んでいくっていう方が、多分人生は楽しくなるっていうのがあって。

—うんうん。

大学に入って、効率がいい人っていうのが羨ましく見える時期とかもあるんですよ。効率がいいもそうやし、サボっている人が楽そうに見える。人間って楽な方に流れがちなんです。流れることはすぐにでもできる

し、流れてしまったら楽やし。でもその時にサボったことの責任を取るの
は将来の自分で、だから、積み重ねてきた過去の自分の責任を今とれ
るかっていうのを自分で意識して動いていて。
—すごいです。

ははは。だから流されることなく、別にそれ（楽な方に流されるこ
と）はそれでもいいんですけど、その結果に対して将来の自分が「責任
を取れよ」って目で見てくると思っているから、あんまり自分の中でサ
ボれへんというか。

立命の校風もそうですけど、自由の裏には責任っていうのがあって、
ここは絶対セツトになっているんで。好きなことだけやってたら、いつ
かそのつけは回ってくるし、一見無駄に思えても、一つ一つしっかりや
ってたら、結果は後からついてくる、っていう考え方が好きでこんな考
え方をしているだけなんですけど。やから、大学に行ったらやれること
が広がるけれども、その中で「自分が本当に何がしたいか」を自分で一
回決めて、決めて選んだことに対しては自分で責任を持って自分でやる
っていうことが、多分いい人生を送る秘訣なんではないかなって僕も最
近いろんな人と話しながら思っているところで。

—いいお話が聞きました。

まああんまり説教くさいこと言いたくないんやけど（笑）。

立守で培った今につながる考え方

自分で考えて調べてってことを繰り返すのは、なんかさすが立守やな
って思うし、それは本当に大事なことでやって今になって思うことでもあ
って。学生の時と社会人で一番違うのは、「正解がないこと」。高校の時
って割と僕、「正解を覚えること」ってというのが得意で、だからテスト

とか割と良い点、取ってたんですよ。

—なるほど、正解っていう。

そう。答えを暗記するとか、与えられた問題に対して求められてい
る、答えを出すっていうのが得意だったんですね。でも、社会に出てか
らって、答えのないものの方が多くって、むしろなんでそれを聞かれて
いるんやろっていう、そっちの方（問題の意図）が大事だったりして。
その辺の本質を捉えて自分の言葉で説明できるとか、そっちの方をわか
っているってほうが、社会で凄い役に立つ。

—私は立守に入ってよかったなって思っているのですが、中塚さんはど
うですか？

同じく。立守に入ってよかったなって思っているし、今おっしゃって
いたお話聞きながら、自分の時も確かにプレゼンの授業とかも含めて今
に活きているなって思ってる。自分の思いを発信する機会も多いし。僕らの
時代はそこまでそうでもなかったけど、今の時代はほんまにその「発信
する」というところがすごい重要になってきていて、SNSの普及とか
その辺にも繋がるんやろうけど。今うちの会社でもプロモーションとか
ブランディングとかに力を入れようとしている。

—ブランディングってどのようなものなんですか？

自分の会社をブランドにするというか、会社の今まで積み上げてきた
ものを含めて買ってもらうとか。そういうマーケティングみたいなこと
を改めてやろうとしていて、発信するとか情報を正しく届けるとい
うのがとても大事になってくる。そこに、非常にその立命館の学びとい
うのが生きてくる部分がある。立守ではそういう「発信」の授業をず
つとやってきているっていうのがすごい先見の明もあるし、ほんまに時代
がそっちに追いついてきたっていう感じがするよね。

—例えばどのようなことですか？

例えばプレゼンの時に、「これを分かってもらうにはどういう構成にしたらいいかとか受け取り手の気持ちを考えて、資料を作るということ」を自然にできていると思うんですけど、これは自分だけではなくて相手の立場にも立っても考える」ということ。

物事にはいろんな側面があつて、その辺の情報の取り扱い、見方っていうかな。片方だけじゃなくて逆の方も見るようにする。自分の主張したいこととか信じたいところだけ人って信じがちやけど、逆の意見の人たちの立場に立った時になんでその人たちはそれをいいと思つていいのかを理解して、その上でどっちがいいかなっていう判断を自分自身もしていきたいと思つていて。それが今、会社や商品のいいところを受け取り手に正しく伝えることにも繋がるし、自分で選ぶっていうことにも繋がるし、色んな人の考えを知つていうのにも繋がるんやけど、その辺の人との関わり方とか「自分の何かを選ぶ上での軸」っていうのが、多分そういう授業とかで確立されるようになってるんじゃないかなつて。そこまで深くは考えているかわからへんけど（笑）。

—はい（笑）。

でも今思つて、自分がこういう考え方にいきついたつていうのも含めて、やっぱりこれは学びのおかげやと思つてるし。高校、大学、中学にも遡るけど、今まで学んできた結果が今の自分を作つてゐるなつて思う。

—立守での経験を踏まえて、これからこういうこととしていきたいなつていうこととかあつたりしますか？

これからは、直近で見えることでは会社でプロモーションの新しい部署ができて、来てくれる人も決まっていたりして、ワクワクしています。今まで思い描いていたけれど、できていなかったことをできそうな

人がきてくれるんで、自分のできることも広がるし、その辺は楽しみ。

もつと長い目でみると、自分が経営者として大事にしたいこととして、「従業員さんとその家族まで幸せにする」つてことを決めてて。自分の子どもが今いるんですけど、例えば自分の子どもに「うちの会社に入りたい」つて言われた時に、「うちはやめといた方がいいで、他探し」つて言うのか、とか「大変そうやけど任せろ」とか色んな選択肢があると思うんですけど、将来子どもがもしそう言ってきた時には、自信を持つて「うちの会社は良い会社だからそうした方がいい」つて言つてあげたい。だからあと二十年以内にはそれは絶対に言えるようにしたいつていうのがあつて、将来の子どものためにも、もつといい会社にしなといけな。

自分も新卒でここ来たら良かったなつて思う会社にしたいし、もちろん従業員さんの家族や子どもにも自信をもつて「ここで働いて良かった」つて言つてもらえる会社にしたい。それが大きい目標です。大変やけど、やりがいがある仕事なんで毎日楽しくやらしてもらつてゐるんですけど。

自分の中でやりたいことが決まつて、こういうふうにやりたいつていうのが決まつていたらどんなことでもできると思うんですよ、将来的におそらく。別に「三億円の家に住みたい」とかも本気でそう思つてたら叶うし、僕もさつき言つてたことに向かつて頑張つてから多分できると思つてゐるし、できるまでやつちゃえば、「ほらできた」つて言えるし。やめるかやめへんかの差でもあつたりして。それこそ、「自分で責任をもつて自分で選んだ道を自分で進む」つていうその辺は何をするにも大事やと思うんで。ね、カッコつけたけど（笑）。

—ははは。

そんなことを自分は大事にして生きていますかね。

―はい。一応予定していたお時間になってしまったので、ここら辺にさせていただこうと思っているのですけれども。

はい、そうですね。

―結構本当に私が聞きたいと思っていましたこともたくさん聞きました。

本当ですか？ だいぶ脱線しちゃったなとか思いながら、ははは。

―中塚さんの思いがとても伝わってきましたし、この立守二十年史のようなもの私が大人になった時にもあるかもしれないですし。

五〇年史がね（笑）。

―ははは。そのときに語れるようにもっと色々経験していきたくなっていました。

そうですね、何かしら考えながら生きてりや、自分の気づきもあるやろうし、自分の傾向を自分の中で持っておくっていうのも何かの役に立つと思う。こうしたら失敗するのかな、こういう時上手くいくなっていうのを自分のパターンとして持っておくっていう、割とそれは外れなかったりする。その辺も考えているかどうかの差で、何も考えてない人は何度も繰り返すやろうし、気づけば失敗も減るかもしれないし。うん。

―是非参考にさせていただきます。ありがとうございます。

【感想】

今回のお話を伺い、立守での経験が大学や現在の仕事にも繋がっており、物事の捉え方の根底には当時の学びがあると語られていた点が特に印象に残りました。高校三年生として進路を考える今、「自分が本当にやりたいと思うことを決め、選んだことに責任を持つことが大切」というアドバイスを頂けたことが、強く心に響きました。この言葉を胸にこれからの自分らしい生き方を見つけていきたいと思っています。



右：語り手 中塚 遼太郎

左：聞き手 井上 愛結